

文化芸術による地域資源発信事業の研究 その1～その3

Research of the transfer works of the native projects by art and culture Vol.1～Vol.3

磯村 克郎

デザイン学部 デザイン学科

Katsuro ISOMURA

Department of Design, Faculty of Design

谷川 真美

文化政策学部 芸術文化学科

Mami TANIGAWA

Department of Art Management, Faculty of Cultural Policy and Management

日比谷 憲彦

デザイン学部 デザイン学科

Norihiko HIBIYA

Department of Design, Faculty of Design

本研究では、浜松市内の市民による自発的な地域活動を抽出し、調査と交流を実践した上で、その実態や特性を把握した。14の市民プロジェクトとの交流と研究によって、その活動は、自発性、創造性、多様性においてこれからの地域活動の事例として注目すべきものであることが明らかになった。

私たちは、その情報を社会へ発信する方法論を検討し、市民プロジェクトの活性化への寄与を図った。

We researched the actual situation and a characteristic of the citizen activity after extracting the voluntary local projects by the citizen in Hamamatsu city. In this study, we practiced an investigation and interaction with the citizen. It became clear that the projects will be examples of notable local projects in the future in initiative, originality, variety by the study with 14 civic projects. We examined methodology to send the information to the society and planed activation of local projects.

1. 研究の背景と目的

浜松市は、多くの地方都市共通の課題（中心市街地や地域産業の衰退、高齢者や障がい者の福祉など）が重なっている状況である。課題には外的原因と内的原因があると考えられる。例えば、中心市街地（写真1）の衰退は、郊外型大型商業施設への購買客の流出もさることながら、初期投資を回収し終えた商店が積極的な商業活動やテナント活動を行わず、商業活動の活気や店舗不動産の流動性が減少していることも原因の一つであるとも考えられる。つまり、中心市街地の商店街では、商業的・店舗づくり的な活動を発生させることが、活性化へのひとつの要件となるであろう。一方で、地域では市民の自発的な活動が多様に見受けられる。また、行政も創造都市の実現に向け、2012

年度から毎年30強程度の市民活動のスタートアップを支援している（みんなのはままつ創造プロジェクト）。我々は、例に挙げた中心市街地に限らず、市民の自発的で創造的な活動を地域の活性化のための重要な内的要因であると位置づけ、ここではプロジェクトと呼ぶこととした。

市内のプロジェクトには、どんなものがあり、どのような活動を行ない、何がそうさせているのだろうか。我々は、プロジェクトを興し活動していく状態や能力のことをProjectabilityという言葉にした。Projectabilityとは、文字通りProjectとabilityを合成したものではあるが、数学用語でも投影されうる状態といった意味もある。まさに、市民の思いを社会に投影するという解釈も出来るということで、研究のキーワードとしたのである。



写真1 浜松市中心市街地



写真2 報告冊子（2013～2015年度）

このような市民による自発的なプロジェクトは、社会的な認知度は十分ではなく、自発的ゆえに相互のつながりや、関わり合う機会も少ない。我々は、地域のプロジェクトを積極的に社会に発信し、社会からの認知や相互交流のきっかけをつくるのが活動の活性化や芽生えにつながると考えた。そして、プロジェクトの内容・思い・社会的意義・今後の可能性を把握し、社会に発信する方法論を明らかにすることを研究の目的とした。

2. 研究体制

地域の自発的なプロジェクトを調査研究する場合、既存の統計的データや各活動の資料は十分でないか相当のばらつきがあることが予測される。例えば活動のキーワードを大量のデータから統計的に抽出するような操作は望めないと思われる。我々の目的は、地域の統計的なデータをつくることではない。そこで、編集的思考とデザイン的思考を活用することを考えた。

編集的思考とは、現場の情報を収集、理解して、複数員の議論を経た上で編集者による情報の選択と位置づけを行なうものとし、都市や地域に関わって来た編集家と地域で多くのプロジェクトに携わって来たコーディネーターを協力者に設定した。調査資料を研究者だけで整理分析するのではなく、専門家による編集という操作で情報整理や分析の公平性を確保しようとするものである。

デザイン的思考とは、現場の情報を観察して解釈し、複数員の議論を経た上でデザインによる図式化・視覚化を行なうものとし、概念の共有やそれによる考察の展開性を確保するものである。これは、デザイン系の研究者や地域のデザイナーが関わり、視覚化することを研究に有効な方法論として活用した。制作した報告冊子Projectability、ProjectabilityⅡ、ProjectabilityⅢ（写真2）は、その最終的な視覚化であると考えている。

考察段階では、ふたつの思考を橋渡しし、情報やデザインの適用のバランスをとり、研究の理論的な要因を担保できるように、大学の現代アート研究者が議論の要となり、適用可能な理論や事例を導入した。

3. 研究の経緯

我々は、地域のプロジェクト複数に知己を持つ地元の協力者および各専門家と協働して、2013年度から2015年度にかけてプロジェクトを調査及び交流しProjectabilityの様相を研究してきた。

2013年度の研究活動は、本研究紀要 第15号に「文化芸術による地域資源発信事業の研究」¹⁾として掲載した。基本的な調査として、14のプロジェクトを選定して、ヒアリング・活動観察・協働（共同ワークショップや試作支援等）を行ない、活動概要や主体の基本情報、プロジェクトの構成要素などを一覧性がある情報に整理した。これを基にした後述の分析を行なった上で、活動をアートやデザインによって視覚化した展覧会（写真3）や報告冊子を制作した。制作においては、都市や地域と関わりが深い編集家や地域のデザイナーや建築家、さらには多くの学生と協働した。

2014年度の研究活動（文化芸術による地域資源発信事業の研究 その2）は、14プロジェクトのうち5つのプロジェクトを選定し、さらに詳細な調査と交流を行なった。それぞれの活動の経緯や主催者の思いをヒアリングや共同イベント等（写真4）を通じて把握していった。また、個々に学生達と指導のデザイナーを配置してその結果を冊子として制作した。また、5プロジェクトの特徴や可能な将来像を共通の語り口で定義し、それを視覚化する報告冊子を制作した。

2015年度の研究活動（文化芸術による地域資源発信事業の研究 その3）は、定義された各プロジェクトの評価指標を検討した。プロジェクトを社会に発信するには、収集編集した情報だけではなく、それを評価して意味を伝えることも必要だと考えたのである。ここでは4つの評価指標を設定した。また、文化・福祉分野の行政担当者と座談会を開催して、市民のプロジェクトを評価することについての議論を行ない、指標とともにそれを視覚化する報告冊子を制作した。

各年度の報告冊子や展覧会では、プロジェクトの様相や導き出した知見の視覚化を行なったが、本稿は、3年分の研究活動を通して、Projectabilityとは何かを問い、その様相を分析して評価指標を設定するまでの流れを明確にして得られた知見を報告するものである。

4. プロジェクトの基礎調査

2013年度に14プロジェクトを選定し、市民のプロジェクトの情報収集と整理を行ない、プロジェクトの構成要素を分析してそのモデルを考案し、視覚化した。

4-1 プロジェクトの抽出

市民の自発的なプロジェクトは、一律の統計等はもちろん



写真3 展覧会（2013年度）



写真4 TAKE SPACEとの共同ワークショップ

ん存在しないし、我々も全ての活動を把握している訳ではない。したがって、完全に公平な選定は不可能なのであるが、ここでは、浜松市の市民活動の支援事業である「みんなのはままつ創造プロジェクト 2013」の39の採択事業の中から、まちづくり、ものづくり、人材育成、福祉などに関して創造性と継続性が期待できる7プロジェクトを抽出し、さらに地元の活動に精通した協力者の紹介で7プロジェクトを加えて14プロジェクトを選定した。

4-2 情報の整理

各プロジェクトに対して、ヒアリング・参与観察を行ない一覧性がある情報整理を行なった(図1)。活動主体の基本情報、活動概要を明示した上でプロジェクトの構成要素をキーワードで抽出した。キーワードは、こども・高齢者・障がい者・ものづくり・学び・医療・看護/介護・まちづくり・風土・伝統・地場産業・地域企業・商店街・コミュニティ・場所・専門家・戦略的素人の18ワードとなった。キーワード抽出に当たっては、前述の編集的思考を活用して抽出基準の妥当性を担保した。いずれも現在の地域の課題を顕著に指し示すワードである。2013年度の浜松市民インタビュー(浜松市企画調整部企画課)の結果の概要マップの重要ワードにほとんどのキーワードが含まれていることから、一定の妥当性が見込まれた。キーワードは、各プロジェクトに複数認められ、それぞれが現実的な課題に複合的に応えようとしていることがわかる。また、そのような活動の深みや幅が創造性や継続性を期待させ、選定された要因になっていると考えられる。

4-3 プロジェクトの構造モデル

以上のように、編集的思考によって抽出された情報は、図1のような一覧表に整理されたのであるが、14のプロジェクトはそのような客観的な一覧表だけで表現できるものなのだろうか。キーワードは言葉のレベルでは共通だとしても、各プロジェクトでは異なる視点や思いで活動しているはずである。これを表現するために、プロジェクトにおけるキーワードの構成を立体的につくり、プロジェクトの視点からみたその構造を視覚化することを試みた(図2)。

キーワードは、4つのレイヤーに配分され、それぞれ次のような構成となった。

- ①「社会の課題」のレイヤー [こども・高齢者・障がい者]
- ②「ものことづくり」のレイヤー [ものづくり・学び・医療・

看護/介護・まちづくり]

- ③「活動の場」のレイヤー [風土・伝統・地場産業・地域企業・商店街・コミュニティ・場所]
- ④「外部人材」のレイヤー [専門家・戦略的素人]

プロジェクトに外部人材を導入しているか、活動の場はどこか、ものやことを成果としてアウトプットするのか、社会的課題を改善しようとしているのか、4層でプロジェクトの成り立ちを設定した。図1では上2層は成果と課題改革に関わるもの、下2層は活動のインフラと考えられる。

プロジェクトごとに顕著な要素をレイヤー間でつなぐと、プロジェクトの様相を視覚化できる。あたかも分子モデルのように、プロジェクトならではの形になる。この形は3Dデータでモデリングされていて、自由なアングルでみることができる。プロジェクトごとに重視している視点から視る、つまりプロジェクトの主体者の視点から活動の構図を視覚化することができるのである。

4-4 プロジェクトの様相

各プロジェクトの情報を一覧表とともに、言葉・構造モデル・ビジュアル資料を併用して表現し、活動の様相を明らかにした。図3は、そのうちのTAKE SPACEの例である。「学び」や「ものづくり」の場として「コミュニティ」をつくろうとして地域と世界につながる野性的な活動現場がTAKE SPACEなのである。

5. プロジェクトの詳細調査

これまでの情報の整理によって、プロジェクトを横つなぎに見ることが可能になった。ここで見えてきた活動の様相は、主催者の思いを基盤に市民の生活や現場や協働から生み出された個性的かつ魅力的なものであるが、そのプロセスや成果はあいまいになることも多い。そこで、それらを記述し、将来像も思い描くことにした。かなり、詳細なリサーチが必要であるので、14活動を5活動に絞って研究し、相互の交流のための座談会も計画した。

5-1 詳細調査の方法

5つに絞った活動は以下の通りで、ものづくりからまちづくり、福祉、人材育成など多様である。

- ①オリジナル注染ゆかた(地場産業の少量多品種生産プロジェクト)
- ②万年橋パークビル(まちなかの活動のインフラ)
- ③FABLAB Hamamatsu(地域と世界のデジタル工房)

図1 抽出された14のプロジェクト 1)表1に加筆

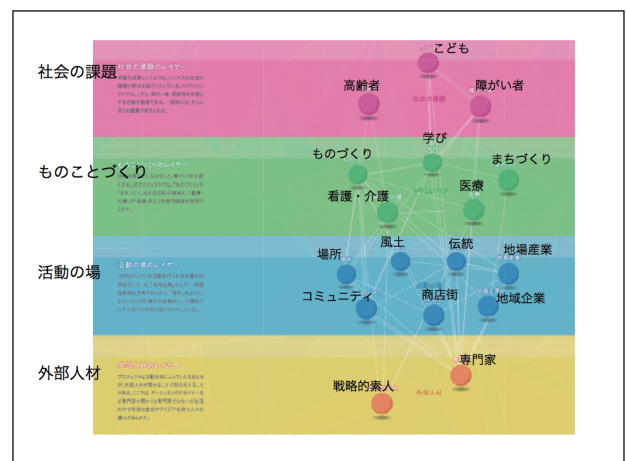


図2 プロジェクトの構成要素と構造

のスターティング)

④じいじばあば萌え（まちなかの高齢者施設実現のスタディ）

⑤根洗学園（こどもの療育方法論の共有化）

これらの活動について、そのプロセスや方法論、成果や将来像を共通の語り口と図式（イラストレーション）で表現し、Projectabilityのポイントを言葉で記述した。活動は主催者の強い思い入れで成立しているのだが、協力者や協働機能によって補完され、外部のアーティストやデザイナーが別の視点を持ち込むことで、活動が活性化したり相互触発が発生したりしているのがわかる。将来像は、主催者からのヒアリングから周辺の地域資源やアイデアを盛り込み、地域での研究グループとして提言したものである。

5-2 Projectabilityのポイント

図1は、TAKE SPACEを例にとったものである。TAKE SPACEは、農家の蔵を改装した市内の鄙びた場所の工房であるが、様々なものづくりの会員がコミュニティをつくり、地域の学校でものづくりに関する教育やワークショップ活動を行なっている。本学とも連携してFAB LAB的ワークショップや施設整備で協働している。一方でMITに認定されたFABLAB HamamatsuとしてFAB LABネットワークによって海外交流を行っている。ものづくりのデータをやり取りする一方、「つくったほうが早い」という現場性を大切にしているので、何がおこるかわからない、誰でも試行錯誤できる拠点になっている。企業に対する試作支援や企業支援、異業種交流、大学との連携などの将来像が考えられる。

5-3 プロジェクトの相互交流

5プロジェクト主催者の座談会では、ほぼ初対面で全く異なった領域の活動をされている方々なのに、最初から和気あいあいと話が続き、お互いの状況や悩みを共有できた。彼らによって異口同音に述べられていたのは、場所——活動の拠点を社会に開いていく、ということであった。いわゆる箱もの施設批判はすでに言及され続けているが、施設づくりの専門家ではない5つのプロジェクトの主催者たちはそれを軽く飛び越え、それぞれの活動の中から施設の多様な開き方に取り組んでいる。その発想や行動様式を基にもう一度施設を考え直したら、現代社会の複雑さや変化に対応できるまちができるのではないかな。

6. プロジェクトの評価指標

以上のようにプロジェクトを把握した上で、評価指標を設定することにした。評価することは、ここでは優劣を付けることではない。プロジェクトの価値を正確に把握し、社会に伝えることを目的としたツールとして捉えている。結果的には、4つの評価指標を設定したのであるが、そもそも指標を使って市民のプロジェクトを評価しようとする場合、それぞれに配点し採点するのか、言葉で表現するのか、相互作用をどう考慮するのか、バランスの取り方はあるのか、非常にあいまいなことを把握する方法論が求められている。点数化のように抽象度が最大になると、説明はしやすいのだが、ほんとうに本質をつかんだ評価なのか不安要素も最大になる。言語化した時は価値を表現しやすいが、解釈の幅が出てくるし相対的な評価は難しい。市民プロジェクトの評価をテーマに、行政担当者と座談会による議論も行なったが、行政の担当者も公的な評価の難しさ、限界という悩みを共有していることも確認できた。

4つの評価指標に関しては、今回は円を4色の色彩のバランスで表示したもので、その現れかたを表現するツールを試作した（図5）。

6-1 評価指標の抽出過程

評価の視点を設定するために、これまでのプロジェクトに関する情報を融合して検討した。各プロジェクト共通の構成要素は4つのレイヤーに分類し分子構造のようにモデル化していたが、詳細調査によるProjectabilityのポイントをこれによって再整理できる。主催者の人物を写真や人物評で思いや性質を表現したものと将来像を加え、6つの視点によるプロジェクトの評価用シートをつくった（図6）。

もともと4つのレイヤーは、「社会の課題」「ものことづくり」「活動の場」「外部人材」のように、プロジェクトの特徴を示していたが、Projectabilityのポイントを当てはめるとレイヤーの視点を評価に通じる言葉に置き換えられる。その言葉は、順に「問題意識-思い」「成果-プロセス」「開き性-ユルさ」「客観性-他者性」のように、結果を求められる明解な視点と、あいまいであるが評価にすくいあげたい視点が表裏一体となった概念になった。これは、4つのレイヤーのプロジェクトの特徴に対して、主催者の人柄やプロジェクトの将来像としての関わりの可能性（つまり通常は、評価の視点から除外されやすいもの）が作用

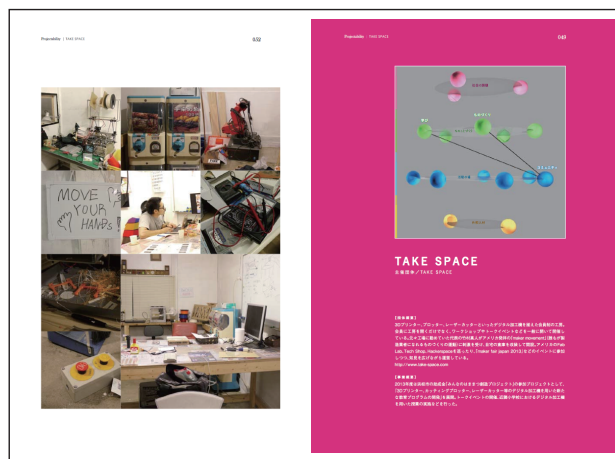


図3 TAKE SPACEのプロジェクトの様相

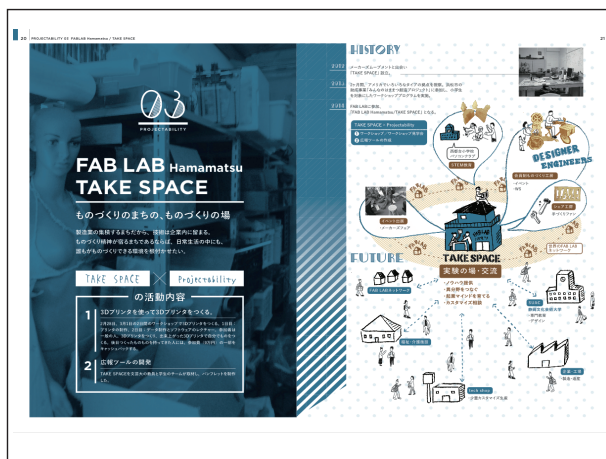


図4 TAKE SPACEのProjectability

して、あいまいなニュアンスが加味されたとも考えられる。

6-2 評価指標の設定

この4つの概念と構成要素を再構成し、シンプルな言葉で表現すると以下のような評価指標としての言葉が見出された(図7)。

①問う力：生活者としての立場から、生活の中で気づいた疑問に対して、問いかけたり、人々に想像させたり、気づかせたりする。

②工夫する力：既存のやり方でない方法でちょっと工夫したり、発想したり、つなげてみる。

③開く力：プロジェクトが仲間内の楽しみや趣味の範疇ではなく、多様な人々を巻き込んだり、外部の人材の力を借りて展開する。

④横断する力：福祉、医療、ものづくり、まちづくりなどのひとつのジャンルにとどまらず、横断的な側面を持つ。

6-3 評価指標のバックボーン

この段階で、新たに協力いただいた高島准教授から、発達心理学者のエンゲストロームの活動システムとの相同性を指摘された(図8)。Projectability指標は、活動システムにおける「越境」や「拡張的学習」を促すために必要となる能力に当てはまるというのだ。横断する力は、活動システムで言う越境の概念であり、開く力はルールや分業に働きかけ、問う力や工夫する力がそれらを見直して解決し、拡張的学習につながると解釈できる。つまり、活動システムが集団の実践を歴史的に理解するものであるなら、Projectability指標は集団の実践を発展させるために必要になる能力と位置づけられるのではないかとこの言及を得た。

このように、ある活動への評価指標として、活動を発展させていくには欠かさない普遍性をもつ可能性が見えて来たが、評価の方法論としては検討途上である。この4つの評価指標は、前述の試作ツールのように色彩で視覚化表現すること、コメントで表現すること、点数化すること、それぞれ可能であると考えられる。

7. まとめ

3年に渡る研究活動で、地域の様々な14の市民活動と出会った。そこでは大学内だけでは決して知り得ない活動現場のおもしろさ(自発性・創造性・社会的意義・当事者性など)を共有することができ、共通した概念-Projectability を抽出し、一覧性がある情報に整理した。



図5 Projectability指標

各プロジェクトについては、テキスト・構成要素の構造モデル・ビジュアルによってその内容を明らかにした。

プロジェクトのうち5プロジェクトについては、さらに詳細な調査と交流を行ない、主催者の人物像・活動・将来像をテキスト、ビジュアルで表現し、Projectabilityのポイントを明らかにした。

さらに、プロジェクトが社会に正確に認知されるために、その価値や意味を把握した上で、評価指標を検討し、これまでの情報を多角的に活用して4つの評価指標の設定をし、色彩による表示ツールを試作した(Projectability指標)。

以上の情報を使ってプロジェクト(地域資源)を社会へ視覚化して発信することが本研究において構築した方法論である。

8. 方法論の実践と今後の展開

方法論の実践として、研究室と地域の協働によって、プロジェクトをアートとして表現する展覧会(17日間で557名入場：詳細は¹⁾ 参照のこと)を開催したり、報告冊子(B5版114頁、64頁、42頁：各1000部)を制作し、社会への発信を行なった。報告冊子は、行政・各地域プロジェクト主体・アートカウンスル・研究者などに流通させた。

また、ウェブサイトも開設し(<http://projectability.info>)、研究の説明や、報告冊子のPDFファイルダウンロードを可能にした。

報告冊子は配布した活動主体からも流通しつつあり、様々なつながりから行政や他地域への会議参加や福祉領域の研究者との共同研究が発生しているところである。

本研究報告は、平成25~27年度 学長特別研究「文化芸術による地域資源発信事業の研究 その1~3」における研究活動の概要を取りまとめたものである。

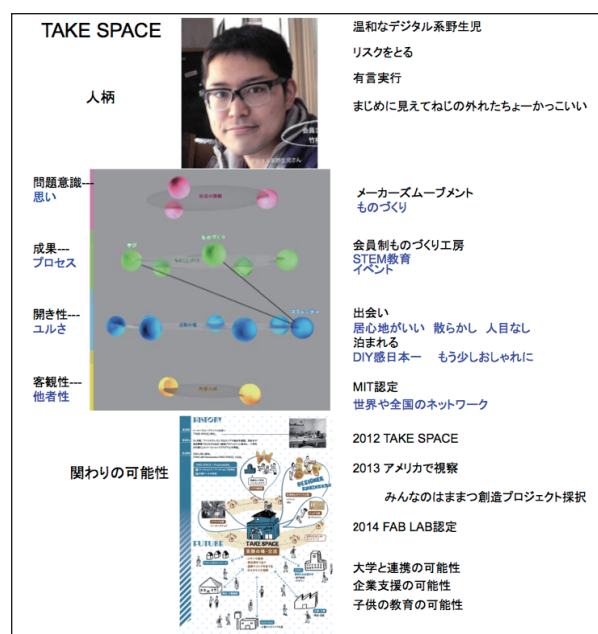


図6 プロジェクトの評価シートの例

注脚

- 1) 磯村克郎、谷川真美、根本敏行「文化芸術による地域資源発信事業の研究」(平成25年度 学長特別研究)
静岡文化芸術大学研究紀要 第15号 (2014)
(https://suac.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=1119&item_no=1&page_id=13&block_id=17)

●研究体制と連携者

「文化芸術による地域資源発信事業の研究」

磯村克郎、谷川真美、根本敏行

(平成25年度 学長特別研究)

研究協力：NPO 法人クリエイティブサポートレッツ

《協働プロジェクト》

【おぺんとう画用紙】

浜松市根洗学園、深澤孝史、松本知子(浜松市根洗学園園長)、佐藤愛美(浜松市根洗学園)、足立志伸(空間造形学科3年)、荒川真由美(芸術文化学科3年)、大岡茜(芸術文化学科2年)、小田桐麻衣(芸術文化学科3年)、小柴希菜(芸術文化学科1年)、柴野遥(芸術文化学科2年)、清水久美(芸術文化学科1年)、鈴木真衣(芸術文化学科2年)、鈴木里圭子(芸術文化学科3年)、外山芽衣(芸術文化学科3年)、中真穂(芸術文化学科3年)、中神智美(芸術文化学科1年)、藤井由貴(芸術文化学科1年)、藤田沙織(芸術文化学科3年)、藤原亜由(芸術文化学科1年)、松永百恵(芸術文化学科3年)、森井睦美(芸術文化学科3年)、谷川研究室

【Simple Forest】

大石るみ(folklore forest 主宰)、柏原崇之、ホシノマサル、前田剛志、山田真由美、Taishi Kamiya、TENKOMORI、磯村研究室

【注染×シルクスクリーンプロジェクト】

大石麻衣子(ファッションきものいしばし)、スサイタカコ、株式会社二橋染工場、株式会社 edition ED、関穂菜美、菅内祐未子、川村早紀、藤

澤友希、山本瑞季、稲垣葵(全て生産造形学科3年)、磯村研究室

【創作盆踊り】

あいのてさん(野村誠、尾引浩志、片岡祐介)、粉川弘子(日本民謡研究会浜松支部支部長)、磯村研究室

【じいじばあば萌え】

近藤洋輔(デザイン研究科1年)、新城大地郎(空間造形学科3年)、和田天風(空間造形学科3年)、磯村研究室

《展覧会》

開催期間：2014年3月1日(土)～23日(日)

月・木・金 / 13:00～19:00、土・日 / 11:00～20:00、火・水/休館

開催会場：文泉堂書店跡(静岡県浜松市中区連尺町314-1)

website=<http://projectability.info>

アートディレクション：磯村克郎(静岡文化芸術大学)、鈴木一郎太(株式会社 大と小とレフ)

展示品デザイン：磯村克郎(静岡文化芸術大学)、鈴木一郎太(株式会社 大と小とレフ)、FUNCTION()

展示品制作：FUNCTION()

展示品制作アシスタント：河合紘太郎(空間造形学科3年)、坂野貴洋(空間造形学科3年)、渡邊弘平(生産造形学科3年)、岸根紳之祐(生産造形学科2年)、佐藤毅秀(生産造形学科2年)、森川堅斗(生産造形学科3年)、山田高寛(デザイン研究科2年)、403 architecture [dajiba]

会場構成：403 architecture [dajiba]

チラシデザイン：SiphonGraphica、植田朋美(有限会社キウエストクリエイティブ)、桑田亜由子

会場写真撮影：尾張美途、Siphon Graphica

展示品制作協力：

【オリジナル注染浴衣】大石麻衣子(ファッションきものいしばし)、スサイタカコ、戸塚ゆう、edition ED

【Simple Forest】神谷泰史、中澤聡子、tenkomori(天竜これからの森を考える会)

【じいじばあば萌え】磯村研究室、和田研究室 建築担当：近藤洋輔(デ

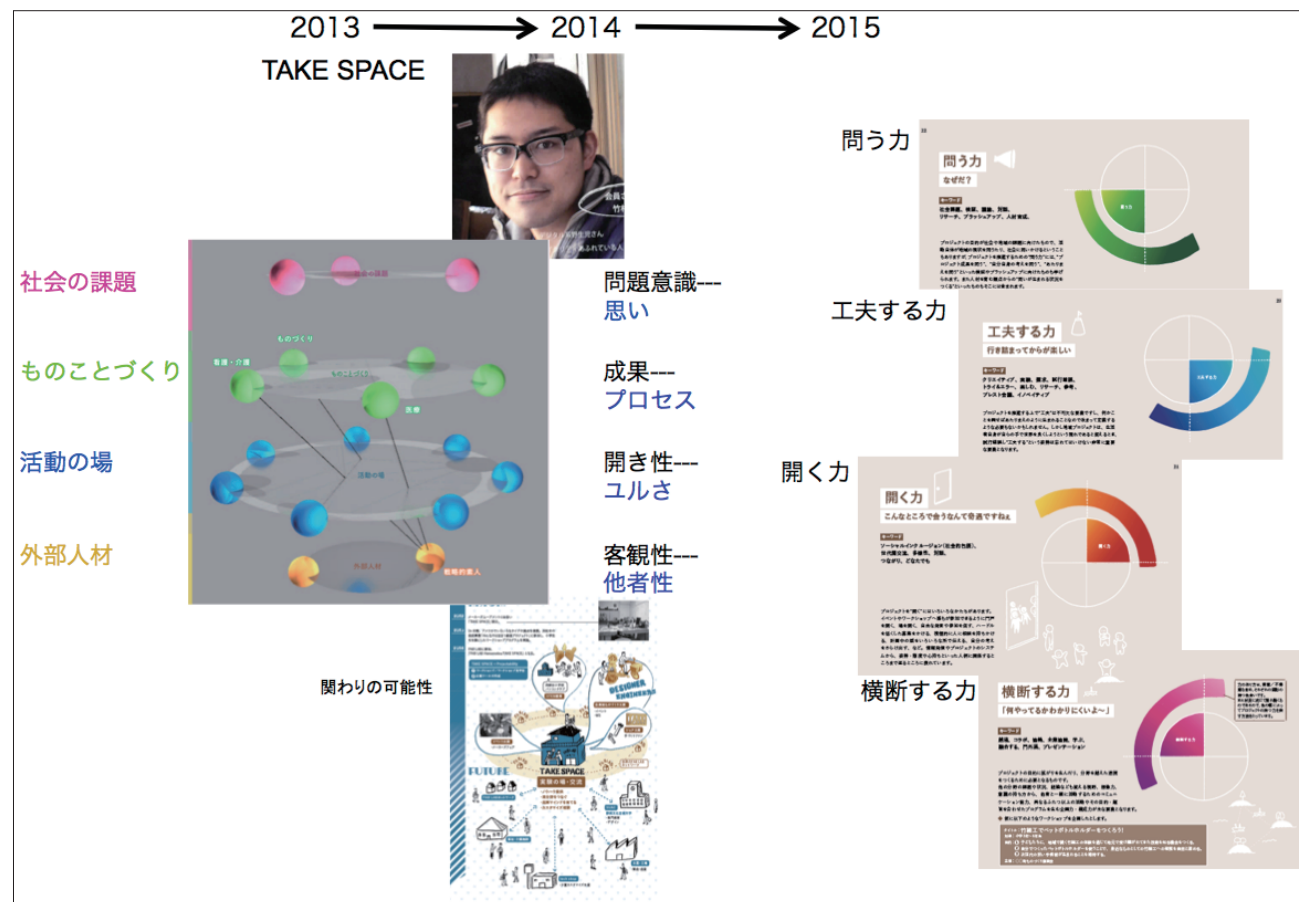


図7 評価指標の設定プロセス

ザイン研究科1年)、新城大地郎(空間造形学科3年)、和田天風(空間造形学科3年)

AR担当:笠井尋(メディア造形学科3年)

【本と遊びの家】青島右京、杉本文郷、戸塚ゆう、戸塚友紀規、畠中梓、星野紀子(絵本の店キルヤ)、ホシノマサル、南達也、山下将光、吉田朝麻

【TAKESPACE】FUNCTION()

【ZING】植野聡子、辻琢磨

【レディオ体操】片岡祐介、北村成美、佐々木友輔、障害福祉サービス事業所アルス・ノヴァ、マッスルNTT

【月いち民踊舞踊と、創作盆踊り】上野壮大(静岡大学4年)、山崎源太(メディア造形学科2年)

【ぶっとびアート】沖村舞子、酒井友章、鈴木青海、宮口夏洋、TAKESPACE

【BEDproject】大東翼、河合紘太郎(空間造形学科3年)、坂野貴洋(空間造形学科3年)

【浜松市根洗学園】片岡祐介、深澤孝史

【非常用リチウムイオン電池電源装置開発と、まちづくりへの展開のためのアート作品制作】住中浩史、Public Studio、(以下すべて生産造形学科3年)関穂菜美、菅内祐末子、川村早紀、藤澤友希、渡邊弘平、山本瑞季、中島渉

【RE】友野可奈子、吉田朝麻

【万年橋パークビル】鈴木基生(田町パークビル株式会社)、友野可奈子、彌田徹(403 architecture【dajiba】)、坂之上莉奈(生産造形学科2年)、東由里恵(生産造形学科2年)

《website制作》

アドレス: <http://projectability.info>

デザイン: 和田研究室、井坂匡秀(デザイン研究科1年)

《プロジェクトカタログ制作》

Projectability~この街で起きていることはどうしておもしろいのか?~ 2014年3月31日発行

発行: [静岡文化芸術大学] [NPO 法人クリエイティブサポートレッツ]

編集: 紫牟田伸子 / 紫牟田伸子事務所

本文テキスト: 磯村克郎、谷川真美、紫牟田伸子(Sh)、鈴木一郎太(Su)

文字おこし: 鈴木真衣 / 芸術文化学科2年、住 麻紀

マネジメント: 鈴木一郎太 / 株式会社 大と小とレフ

デザイン: Siphon Graphica、植田朋美 / 有限会社キークエストクリエイティブ、桑田亜由子

印刷所: 松本印刷

「文化芸術による地域資源発信事業の研究 その2」

磯村克郎、谷川真美、日比谷憲彦

(平成26年度 学長特別研究)

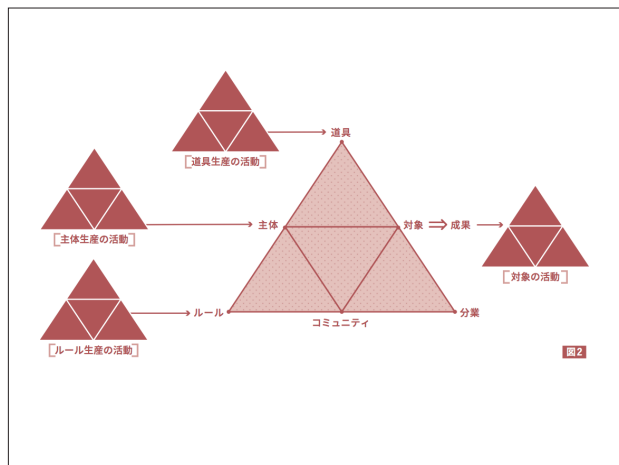


図8 出所:Engeström,1987,p.87 Figure 2.7をもとに高島作成

Projectability II

2015年3月31日 発行

発行 静岡文化芸術大学 磯村研究室 谷川研究室

静岡県浜松市中区中央2-1-1 TEL 053-457-6111 URL <http://www.suac.ac.jp>

編集 紫牟田伸子(紫牟田伸子事務所)

テキスト執筆 磯村克郎 谷川真美 鈴木一郎太 紫牟田伸子

マネジメント 鈴木一郎太(株式会社大と小とレフ)

デザイン 宮下ヨシヲ(Siphon Graphica) 植田朋美(有限会社キークエストクリエイティブ)

イラスト 植田朋美

印刷 松本印刷

【推進体制】

プロデュース 磯村克郎(静岡文化芸術大学) 谷川真美(静岡文化芸術大学)

日比谷憲彦(静岡文化芸術大学)

総合ディレクション 磯村克郎(静岡文化芸術大学)

企画・ディレクション 鈴木一郎太(株式会社大と小とレフ)

[オリジナル注染ゆかた]

ゆかたデザイン:ウエダトモミ(グラフィックデザイナー、ファブリック作家) ウェブサイトデザイン監修:鈴木力哉(PANPOT DESIGN WORKS)

ウェブサイトデザイン:和田研究室 井坂匡秀(デザイン研究科2年)

協力:大石麻衣子(ファッションきものいしばし) 二橋工場

[浜松市根洗学園]

座談会参加: 浜松市根洗学園職員のみなさん 片岡祐介(音楽家)

深澤孝史(美術家)

柏木陽(演劇家) 記録写真ワークショップ講師:ヨシダタイスケ(写真家)

冊子デザイン監修:宮下ヨシヲ(Siphon Graphica) 冊子デザイン:西山千加(デザイン学部メディア造形学科2年) 今泉諒(デザイン学部生産造形学科2年) 協力:松本知子(浜松市根洗学園) 真鍋智美(浜松市根洗学園)

浜松市根洗学園職員のみなさん

[じいじばあば萌え]

冊子編集:鈴木一郎太(株式会社大と小とレフ)

冊子デザイン:近藤洋輔(デザイン研究科デザイン専攻2年) ベレバー・ミカエル(デザイン学部生産造形学科2年) 佐々木美佳(文化政策学部芸術文化学科2年) 成瀬史織(デザイン学部メディア造形学科2年)

協力:じいじばあば萌え

[FAB LAB Hamamatsu/TAKE SPACE]

ワークショップ講師:ファブラボ浜松ティクスベス

見学会ガイド:松田優(YU MATSUDA DESIGN)

パンフレットデザイン:日比谷研究室 梶田夏子(デザイン学部メディア造形学科2年) 山下里奈(デザイン学部メディア造形学科2年)

協力:竹村真人(ファブラボ浜松ティクスベス 代表)

[万年橋パークビル]

冊子編集:鈴木一郎太(株式会社大と小とレフ)

冊子デザイン:坂之上莉奈(デザイン学部生産造形学科3年)

協力:鈴木基生(田町パークビル株式会社)

「文化芸術による地域資源発信事業の研究 その3」

磯村克郎、谷川真美、日比谷憲彦

協力: 高島知佐子

(平成26年度 学長特別研究)

Projectability III

2016年3月31日 発行

発行 静岡文化芸術大学 磯村研究室 谷川研究室

静岡県浜松市中区中央2-1-1 TEL 053-457-6111 URL <http://www.suac.ac.jp>

編集 紫牟田伸子(紫牟田伸子事務所)

テキスト執筆 磯村克郎 谷川真美 鈴木一郎太 紫牟田伸子

マネジメント 鈴木一郎太(株式会社大と小とレフ)

デザイン 植田朋美(有限会社キークエストクリエイティブ)

ウェブサイトデザイン有限会社キークエストクリエイティブ 鈴木力也(PANPOT DESIGN WORKS)

【推進体制】

プロデュース 磯村克郎(静岡文化芸術大学) 谷川真美(静岡文化芸術大学)

日比谷憲彦(静岡文化芸術大学)

協力 高島知佐子(静岡文化芸術大学)

共同研究・コーディネーション 鈴木一郎太(株式会社大と小とレフ)

プロジェクトエディット 紫牟田伸子（紫牟田伸子事務所）

h25minpro.html

参考資料

浜松市 みんなのはままつ創造プロジェクト 2013

<http://www.city.hamamatsu.shizuoka.jp/kikaku/intro/souzou/>

浜松市企画調整部企画課 「新・総合計画の策定に係る市民インタビュー」
2013

http://www.city.hamamatsu.shizuoka.jp/kikaku/documents/3_siryou3_d3.pdf